

ホルスタイン種子牛に見られた多鼻 (double nose, vertical type) の病理学的特徴

谷本 忠司¹, 酒井 賀彦², 明神 由佳³

¹高知県西部家畜保健衛生所高南支所, ²高知県中央家畜保健衛生所病性鑑定室,

³高知県中央家畜保健衛生所病性鑑定室

早産（妊娠 8 か月）で生まれたホルスタイン種雄子牛が、虚弱及び鼻の異常により病性鑑定殺された。子牛は鼻が二つ垂直に形成され、上の鼻（以下、「上」と略）は小型で単鼻孔であり、下の鼻（以下、「下」と略）は外観上正常であった。上の鼻は頭蓋付近で皮膚及び鼻骨が欠損し、欠損部分は硬く半透明な膜により覆われていた。直下の前頭洞相当部には、軟骨性の洞構造が形成されていた。鼻の横断面で、上は鼻中隔及び鼻甲介が未発達であり、咽頭及び下との連絡はなかった。下には正常な鼻腔構造が見られた。その他臓器に著変は見られなかった。組織学的に上及び下の細胞成分及び構造は本質的に同様であった。母子の血清抗体検査を牛の異常産に關与する主な病原体 8 種類（アカバネ、アイノ、チュウザン、イバラキ、流行熱、牛下痢・粘膜病及びブルータングウイルス並びにネオスポラ原虫）について行ったが、全て陰性であった。当該家系及び農場における

先天異常の発生はなかった。症例の病理学的特徴は、多鼻と呼ばれる発生の非常に稀なヒト鼻孔の先天性過剰形成のうち、鼻が二重に形成される double nose であり、その中でも垂直に形成される vertical type に相当した。合併病変としての鼻骨及び前頭洞病変はヒトでも報告がない。動物における多鼻の発生は、演者らの文献渉猟の範囲では報告がなく、本症例は極めて貴重と考えられた。原因は明らかにできなかったが、血清抗体検査結果から、少なくとも牛の異常産に關与する主な病原体 8 種類の關与は否定された。発生機序として、鼻の原基から小原基が垂直に分離又は発生し、原基は下の正常鼻に発達したが、小原基は上の異常鼻に発達したと考えられた。その結果、上には、鼻腔構造の未発達、頭蓋骨付近での鼻骨の欠損、前頭洞部分での軟骨性洞構造の形成が生じたと考えられた。